これからも皆さんと共に・・・。

「広報さめがわ」の創刊は昭和 27 年 9 月。「鮫川公民館報」として、新聞紙を 2 つ折りにした大きさのタブロイド判で発行されました。昭和 33 年 4 月の 57 号から題字が「さめがわ」と変わり、翌 34 年 6 月の 71 号から「館報さめがわ」となりました。昭和 36 年 12 月には 100 号に、そして、昭和 37 年 5 月の 104 号から「広報さめがわ」と題字も変わり、B 5 判サイズになりました。その後、昭和 40 年 1 月の 134 号から A 4 判サイズで発行されました。昭和 45 年 7 月で 200 号を迎え、その後平成 6 年 4 月の 484 号まで 24 年間、B 5 判サイズで発行されました。平成 6 年 5 月からはサイズが A 4 判に、文字もひとまわり大きくなり、平成 9 年 4 月から表紙が 2 色刷りとなり現在の 700 号まで発行されてきました。

これまで「広報さめがわ」は村民の皆さんに親しまれ、村の歴史と村民の歴史を記し続けてきました。これからも村民の皆さんの協力を得ながら、未来へとつなげていきます。

舘山公園頂上から広畑方面を望む

鮫川村の、未来を見つめる。

この8月号で、「広報さめがわ」は700号を迎えました。
創刊から60年。広報紙も鮫川村も幾多の変遷を重ねてきました。
過去から現在、そして未来へ――。
今月号では、これからの鮫川村について考えたいと思います。
さまざまな立場や視点から、
6組の方々に鮫川村の未来について語ってもらいました。

広報さめがわ
700号記念特集

鮫川村の、未来を見つめる。

化学を過信しないで小規模でも自立した農業を

鈴木芳保さん（大石草）

これからの若い人たちが農業をやっていくためには、小規模でも自立できる農業を目指していく必要があると思います。そのためにも、今までと同じような農業をするのではなく、差別化した農業でないと難しいですね。その方法として、私は有機肥料を使った松本農法に取り組んでいます。

都会には、有機野菜などをこだわって買う人が多くいます。その人たちをターゲットにした販売ルートの確立、インターネットなどを利用した地道な宣伝活動が必要だと思います。

放射能の問題を除けば、鮫川村の水と空気、草刈りが行き届いた景観の美しさはほかに負けないものです。ずっと鮫川村に居るとなかなか気付きませんが、鮫川村に来たいと言う人は多くいます。この環境を守り続けていかなければならないですね。農業だけに限らず、化学に頼らない村づくりをしていってほしいです。

今は一年を通してできる農業を模索中で、後進のために道筋を作っていくのも私たちの役目だと思っています。

ツアー参加者に農業について説明する鈴木さん

みんなが仲良し、そう言える鮫川村が理想

宗田めぐみさん（官代）

子どものときに自然とふれあって遊んだ経験をしたことで、大人になって子どもができたときにも、そういう環境で子どもを遊ばせたいと思えるような鮫川村になってほしいですね。

私自身、これから結婚して子どもができたとき、休日にいろんな所へ出掛けるのもいいと思いますが、車やテレビなどの物に頼らず、自然とふれあいながら遊ぶような体験を子どもにさせたいです。そんな体験をすることで、優しい気持ちや感情豊かな人間性を身に付けられると思います。

村民みんなが顔なじみと言える地域のつながりが理想です。お年寄りから若い人、子どもまで、みんなが顔見知りで付き合っていければいいですね。

本当に小さな村などで、自分の子どもを隣近所の人に預けたりするという話もありますが、鮫川村でもそんな地域の関係性ができればと思います。そうなることによって、一人暮らしのお年寄りや村外からお嫁にきた人などが寂しい思いをするようなこともないと思います。

村民みんなが仲良しで、ほんわか温かい雰囲気のする鮫川村になっていけばと思います。

お年寄りと子どもたちのつながり

人と人とのつながりが鮫川村の福祉を支えていく

関根幸治さん（水口）

私は今、福祉関係の仕事をしています。高齢化や核家族化が進み、一人暮らしの高齢者が増えている中で、福祉の需要に対しての供給量は足りていないと感じます。ただ、それを補っているのが、村の人たちの人間味、地域のつながりだと思います。

私たち福祉に携わる者は、二十四時間三百六十五日、利用者の方と一緒にいることはできないので、地域のつながりが果たす役割は大きいと思います。いつも近くに見守ってくれている人がいる、こんな地域性は鮫川村の誇れるものです。若い人にとっては、それが厄介だと思う人もいるかもしれませんが、福祉に携わる側からすると、密な地域のつながりがとても重要に思えます。私は、地域の力も一つの資源と考えています。

福祉の制度や技術は、時代の変化に合わせて変わっていきます。でも、これから先も人と人とのつながりが保たれて、地域の力を借りていくことができれば、鮫川村のような過疎地域でも高齢者が安心して生活することができると思います。

優しい笑顔で利用者と話す関根さん

広報さめがわ
700号記念特集

鮫川村の、未来を見つめる。

子どもたちが大人になったとき、より安心して子育てできる環境に

蛭田和彦さん・美幸さん（田苗下）

鮫川村は子育ての支援が充実していると感じます。紙オムツの支給などもしていて、とても助かっています。子どもたちを連れてホタルを見に行きましたが、自然豊かで、子育てする環境としてとてもいいと思います。

ただ、もっと便利になるといいですね。特に、医療に関しては子どもが急に熱を出したときに近くに小児医療関係がそろっていないのが困ります。ちょっとした薬を買うにも、村を出ないと行けないので心配です。

思春期ふれあい体験に協力いただいた美幸さんと希ノ風（ののか）ちゃん

家はお母さんたちも見てくれるので、子どもを任せて買いに行くこともできますが、もし夫婦だけで生活していたら薬を買うのも一苦労だと思います。自分の子どもたちが大人になって子育てをすることを考えると、これからの鮫川村が医療面でも発展することを期待したいですね。あとは、この自然環境を大切にしつつ、遊具がそろった公園が増えるといいですね。そこで、遊び場を通しての子ども同士、保護者同士の交流もできると思います。

この子たちが子育てをするときに、今よりもっと安心して子育てできる環境であってほしいです。

川に生き物がたくさんいたあのころの環境を取り戻したい

高杉晃さん（大竹）

環境の基本は、なんと言っても「水」だと思います。蛇口をひねればきれいな水が飲める、川には動植物がたくさんいる、これは最高の環境と言えます。

私が小・中学生のころは、川に行けば沢ガニやホトケドジョウ、ヤマメ、水草などたくさんの生き物や植物を見つけることができました。それだけ川の水がきれいだったということです。今では、その数もだいぶ減ってきてしまいました。

その原因の一つは、農家が忙しくなったことによって、農薬を使うようになったことでしょう。そして、農薬によって川は汚れていき、川の生き物なども保護をしなければならない状況になっています。でも、最近では生態系に配慮した農薬を使うようになったり、合併浄化槽がだんだんと普及したりしていますね。そういう努力が必要だと思います。

それから、杉山が多く見られますが、これからは自然に生える雑木林を増やしてほしいです。そうすることによって、ミネラル分を多く含んだ水もでき、生態系が戻っていけばいいなと思います。昔のようにきのこや木の実などが豊富にある自然環境を取り戻してほしいです。

蜜蜂から活力をもらうという高杉さん

私たちが卒業したあともずっと強いチームでいてほしい

矢吹瑞樹さん（真坂）

私は小学一年生からバレーボールをやっています。週三回、トレーニングセンターで練習をしていて、この前の総合体育大会県中県南大会でも優勝しました。

練習は厳しいと思うときもありますが、お父さん、お母さんたちも一生懸命応援してくれます。将来、バレーボール選手になることが夢です。

私たち六年生が卒業したあとも、後輩たちにはどんどん強くなってほしいです。そして、バレーボールだけではなくて、ほかのスポーツも強くなって、一生懸命スポーツをやる鮫川村になってほしいです。今も鮫川村でやっているバレーボールの講座があれば参加していますが、ほかにも面白そうな講座があれば参加していきたいと思います。

総合体育大会県中県南大会で優勝

今の鮫川村は自然がいっぱいで、村の人はみんな明るく元気ですよね。これからは、子どもたちがみんなで集まって遊べる場所ができるとうれしいです。